

3 年	体育	器械運動「跳び箱運動」 6 時間	概 要	領域による適・不適 学習環境、メタ認知、振り返り	適 ○
手 立 て		・自分の課題に合った練習の場所を選択できるようにする。切り返し系・回転系それぞれについてスモールステップの場を用意し、できるようになったら次の段階にすすむことのできる場を設定した。 ・学習カードの活用（２種類） ①各技のポイントの紹介カード →どのような練習すればよいかを掲載し、視覚的にも支援する。また、図に赤で自分の意識したいところを囲ませることで、自己の目標を明確にもてるようにする。 ②振り返りカード →技のポイントの中でできたところと次回への課題を記入し、次時への見通しや意欲をもたせるようにする。 ・赤白帽子を活用し、意思表示をさせる。 赤の場合→友達にアドバイスをもらいながら練習する。 白の場合→一人で黙々と練習する。	児 童 の 様 子	・最初は跳び箱に対して恐怖心を抱いていた児童が、「できるようになった」「次の場所も挑戦してみたい」と前向きに挑戦する姿が見られた。 ・自分に合った練習の場を見つけ、踏み切りや着手、着地などの自分の課題にじっくりと取り組んでいた。 ・授業中に自分の意識したいところを確認したことで、本時でどんなことを頑張りたいのかが明確になり、出来栄を高めようとする姿が見られた。 ・自分のめあてに対する成果と課題を書くことで、授業開始時から意欲的に課題に取り組んでいた。 ・帽子を白にして、一人で黙々と練習に取り組む児童が多かった。また、技能の高まりに変容はそれほど見られなかった。一方で、帽子を赤にした児童は、少数ではあるが、仲間からアドバイスをもらったことで技能の高まりに変容が見られた。	
成 果		・低学年の「跳び箱遊び」から「跳び箱運動」の移行期間における３学年において、自分で場を選択して練習する環境があることは、跳び箱に対する恐怖心を取り除くためにも有効であった。 ・これまで運動に対して苦手意識のあった児童も、どの時間も最後まで自分の課題を解決しようと粘り強く取り組むことができた。	課 題	・多くの場を設定したことから、準備・片付けに多くの時間を費やしたため、学年や実態に応じた場の精選が必要。 ・技能が身に付いていない中で、興味本位で他の場で練習する児童も見られたため、技能を高めることのできない児童が出てしまった。 ・全員が自分の姿を確認できていないため、技の出来栄が高まらない児童もいた。	